

Title	33 : 卒後研修課程43期生による症例展示 - リテンションケース -
Author(s)	河角, 久美子; 高橋, 彩記子; 佐竹, 奎亮; 西村, 達郎; 水野, 周平; 武笠, 友里香; 森川, 泰紀; 西井, 康
Journal	歯科学報, 120(4): 513-513
URL	http://hdl.handle.net/10130/5349
Right	
Description	

No.33 : 卒後研修課程43期生による症例展示 —リテンションケース—

河角久美子, 高橋彩記子, 佐竹奎亮, 西村達郎, 水野周平, 武笠友里香, 森川泰紀, 西井 康
(東歯大・矯正)

目的：東京歯科大学歯科矯正学講座の卒後教育では、動的矯正治療を中心とした診断学や治療学に重点が置かれる傾向がある。しかし動的治療後の後戻りや咬合の安定性についても、長期管理に関する概念の習得が十分に行われる必要がある。そこで当講座の卒後研修課程では、研修修了認定に際して引継症例に対する長期保定管理を行い、リテンションケース1例を提示することが義務付けられている。今回卒後研修課程43期生6名は、Le Fort I型骨切り術と下顎枝矢状分割術の併用による外科的矯正治療を行った顔面非対称を伴う骨格性下顎前突症例について、治療前、治療後、保定2年経過した後の資料を用いて比較、検討した。

症例：装置除去後2年0か月～4年6か月経過している女性4名男性2名であった。初診時、ANB角は 1° ～ -7° と骨格性下顎前突であり、顔面正中に対してMentonにおける偏位量は7～12mmであった。6症例すべて非抜歯症例であった。保定装置は上顎においてCircumferential type 単独6例、

下顎においてCircumferential type 単独3例、Fixed type 併用2例、Fixed type 単独1例であった。

結果および考察：外科的矯正治療を行った顔面非対称を伴う骨格性下顎前突6症例の後戻りについて検討を行った。叢生量の後戻りに関しては、5例で0mm、1例で -0.5 mm、Overjetの後戻り量は、5例で0mm、1例で1.5mm、Overbiteの後戻り量は4例で0mm、2例で0.5mmと、保定としては良好な結果となった。これは除去後から現在まで保定装置を使用しており、使用状況が良好であったことが考えられる。保定装置による違いは認められなかった。骨格的にはANB角にて5例で変化を認めず1例で 1° の変化を認めた。Mentonの偏位量は4例で変化を認めず、2例で1～2mmの後戻りを認めた。これは顎骨の移動量や口腔周囲筋の影響であると考えられる。長期的に安定した咬合を得るためには初診時の咬合状態および、治療過程を踏まえ、習癖の除去や装置の適切な使用指示による保定管理が必要と考えられる。